師弟関係の僕ら

塩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
師弟関係の僕ら

【Ｎコード】
Ｎ０６５９Ｘ

【作者名】
塩

【あらすじ】
誰かが言った。――力なき者はただの道具、と。僕は、強くなりたかった。大切な人ぐらいは、自分の手で守りたい。たとえ、もう手遅れだとしても。

序章～物語は始まっていた～※イラ付（前書き）

流血シーン、下品な発言が苦手な方は読まないほうがいいと思われます。

序章～物語は始まっていた～※イラ付

＞i31938―40058＜
友人作※転載保存禁止※

「あっ、私。カランだけど」

「やっぱりあんたの言うとおりみたい。最近違和感を感じる」

「いつまで観察を続けたらいいと思う？」

「異変が起きるまでって……なにかが起きてからじゃ遅いでしょ」

「笑い事じゃない！」

「……まぁもう少し様子を見る。私だって人が傷つくのみたくないし」

「さすがの私も、学校中のみんなを守ることはできないよ」

「けど、毎日頑張ってるんだからね」

「気持ちのこもってない応援ありがとう。それじゃ、また連絡するわ」

電話を切る。沈黙の中、私は会話の内容を振り返った。

……強く、ならなくちゃ。

横に置いてあった木刀をつかみ、せまくるしい談話室から出る。

急ぎ足で向かう先は、生徒用訓練場。
気は抜けない。いつでも、どんな敵が来てもいいように。
少しでも、少しでも――強くなるんだ。

＊物語は始まっていた＊

一章〜二人が出会ったのは偶然、誰もが思った〜

あたたかな風が、僕たちの間に吹き込んだ。どこからか、花の香りがする。
そんな穏やかな場所で、僕とヴェイル先輩は深刻な面持ちで向かい合っていた。
「いいか……絶対に目をそらすんじゃねえぞ」
短く刈られた髪。両耳にピアス。パッと見ると不良と勘違いされそうなのがヴェイルだ。今のように鋭い目つきで見られると、眼力だけで三人は倒せそうなほど、迫力がある。
「え、あっ、ちょ……ちょちょちょちょちょっと待って……心の準備がまだ出来てないんだけど！」
「待たん！」
ヴェイルが素早く僕に近づく。彼の片手には木刀。
「……う、うわぁっ！」
とりあえず、反射的に横へかわす。
「だからかわすなって言ってんだろっ！」
木刀が横へすべりこみ僕の右横腹を狙う。――こっちも、木刀で受け止める。
「おっ、なんとか防御はできるようにはなったか？」
「何日練習してると思ってるんだよ。さすがにこれぐらいは」
とか言いつつ、実のところ相手の力に圧倒されている。僕は木刀を握る力をこめ、ヴェイルの木刀を振り払おうとした。
しかし、彼の木刀が離れたかと思ったと次の瞬間。次は、左の横腹を狙われた。
「うぐッ！！」
直撃だった。目の前が白くなる。そのまま、僕は草の上に倒れ込んだ。
「ったく、最後まで油断すんなよな」

「……う、ぁ……」
激しくせきこむ。周りの景色がゆがんで見えた。
「しんどいか？そりゃあ力こめたからな」
「……大人げないって、ヴェイル」
「まだ俺は大人じゃないから。あ、立てるか？」
手を差し出される。弱々しく首を横に振った。
「気持ち悪……」
「……お前、本当に打たれ弱いよな」
さっきの攻撃は……いくらなんでも強すぎだったと思うんだけど。
「しゃーねえな、ほら、医務室までおぶってやる」
ヴェイルが、しゃがんでくれる。ゾンビのような動きで背中にしがみつく。
「あ、ありがとう」
十五という年で、おんぶされるなんて恥ずかしいことだろう。でも、毎度のことだから慣れてしまった。
「お前……また軽くなったんじゃね？ちゃんと食べてんのか」
軽くジャンプされる。今の僕にとっては、その振動さえも意識が薄れる威力があった。
「……食べてる。早く医務室運んで」
「はいはい、じゃ、行くぜディオ」

医務室へと続く廊下を歩きながら、ヴェイルが口を開いた。
「なぁ」
「……なに？」
「入学してから何ヶ月になるっけ、お前」
「明日で2か月になる」
弱い自分を変えたくて、ここ――ペルクール学校に入学した。……それなのに、僕は全く変わらない。
「……マジか！」
「なんでそんなに驚くのさ」

「入学したときと全然変わってねえじゃん。弱々しさとか弱々しさとか……うげげげ」
思いっきり首を締めてやる。おんぶされているとこういうとき便利だ。
「ギブギブ！！……悪かったってディオちゃん」
「わかってる、自分が弱いことぐらい。……そんな自分が嫌だから……ここに来たんだ……」
2か月前、住んでいた村を出てこの国の軍学校に入学した。とある出来事をきっかけに。思い出すだけで、額に冷たい汗がつたる。
――悲鳴。悲鳴。悲鳴。そして、血。
「……あー悪い！嫌なこと思い出させちまった」
黙り込んだ僕に、なにを思ったのか謝罪の言葉を述べる。
「なんだ。気にすんな！まぁディオがここに来たときはかなりビビッたけど……村にいたときみたいに楽しくなったし」
「……うん、ありがとな」
ヴェイルは僕の幼馴染だ。入学する前までは毎日のように遊んでいた。とても仲がいい――それなのに僕は、ヴェイルに軍学校にきた理由を話していない。
話したくても、話せないというのが現状だ。ヴェイルも気をつかってくれているのだろう、深く聞いてこない。いつになったら言えるだろうか。
「ほら、医務室だぜ」
「あっ、うん」
「じゃましまーす」
明るいあいさつでヴェイルがドアを開く。消毒液のにおいが、鼻をさした。
「はいはぁい」
若い女性の声が近づいてくる。薄ピンクのスーツの上に白衣をきた、色っぽい先生だ。さらさらのロングヘアがたまらない、とヴェイルがよく言っている。

「どなたですか？あぁ、またあなたたち？」
マレンダ先生が大げさに驚く。
「毎度毎度悪いっす。まぁた、ディオが倒れたんでベッド借りてもいいですか？」
またを強調するな！
「はいはぁい、ベッドなら空いてるわよ」
白を基調とした広い医務室。壁際にはベッドが3つ等間隔に置かれているだけの質素な部屋だ。薬品は隣の倉庫にしまってあるらしい。
「さぁディオくんどうぞ」
真っ白な白衣をゆらし、シーツのしわを整えてくれる。そして、僕は思いっきりベッドに投げつけられた。
「ごほっ」
「永久に眠れ！」
「言ってることはかっこいいけども！怪我人を投げつけるなんて最低だ！」
「相変わらず仲がいいわね」
「どこがですか！？今の状況でどうみてそう見えるんですか！！」
マレンダ先生も……相変わらず抜けている。
「おいおい、怪我人は黙って寝てろよ。先生、こいつの腹見てやってくんねえかな」
「今日はお腹なのね」
先生は、微笑を浮かべ僕の制服をめくる。青紫色のあざが広がっていた。見ているとさらに痛くなってくる。
「これはひどいわねぇ。ヴェイルくんがやったの？」
「はい、もちろん」
なぜ誇らしげなんだろう。普通謝るとこだと思うんだけど。
「とにかく急いで冷やすことにしましょう。氷、氷っと」
先生は、カーテンを閉めて隣の部屋へ行った。
「ここまで運んできてくれてありがとな、ヴェイル。一応お礼を言

っておく」
「いつものこった、気にすんなよ」
ヴェイルが、ベッドの端に腰をかけた。
横を向いて寝ると、横腹が苦しい……。仕方なく仰向けで寝る。
「なぁ」
ふと目を閉じると、ヴェイルが声をかけてきた。
「……なに」
「ちょいと前に実技試験があったとか言ってなかったけ？」
実技試験？　あぁ、木刀の扱い方みたいなやつ？
「……」
「受かったのか？」
「……」
嫌なことを思い出させたな。
「おーい、ディオくーん？」
……答えないのも悪いと思った。
「受かった……って言ったら嘘になる」
「やっぱり不合格ね」
「やっぱりってなんだよ！！」
さりげなくひどいよな、この人！
「仮にディオが受かったなら、わーい受かったよヴェイルお兄ちゃん！って自慢してくるだろうから」
「ねぇ、ヴェイルの頭では僕ってどんなキャラなの？」
「にしても……」
あ、無視した。
「第一実技試験だろ？基本中の基本だろ？それすら合格できなかったのかよ。ヤバいぜ、ディオ」
「う、うん。先生に言われた。第一実技に受からなかったのはお前が初めてだって」
「すげえ……学校中で名前が知られてんじゃねえかお前」
「不名誉だ――！！」

でも、ありえなくもない。最近やたらと冷たい視線を感じるし。
「このままだと留年すんじゃね？」
心の底から笑われる。完全に否定できない自分に泣けた。
「先生にも言われたし、それ。だから特別講師をつけられた」
「はぁ？特別講師ぃ？」
「うん、学年上位の子だって。いい人だからよく教えてもらいなさいって」
「講師っていうのに、同じ学年のやつに教えてもらうのかよ」
「えーっと……ひまな先生がいないんだって。そしたら、その人が自分からやるって言ってくれたらしい」
僕のために時間を費やしてくれるなんて、相当いい人だろう。
「たしかに、ディオは俺の修行じゃ成長してねえしな。もっと上手い人に教えてもらったほうがいいだろ」
「僕もそう思う」
「ちょ……ここは、ヴェイルも上手いぞって褒めるとこじゃねえの？」
「はいはぁい。ディオくんお待たせ」
ロングヘアをたなびかせながら、マレンダ先生が戻ってきた。
「これでよく冷やすのよ」
氷がたくさんつまった袋を受け取る。お腹に当てると、痛みが少しラクになった。
「で？その特別講師についてもっと詳しく」
「あら、特別講師？なんの話？」
ヴェイルのバカ！空気を読め！
「あっ、いやっ、ななななんでもないですよ」
「マレンダ先生、こいつ第一実技に落ちたんっすよ」
「うぁぁぁぁぁぁ！なんで言うんだよ！」
悪びれてない笑顔がムカつく！
「……あらまぁ」
先生の哀れんだ目が痛い！

「それで特別講師、ね」
泣いてもいいですか。いや、泣かせてください。
「……はい。その人は、学年でも飛び抜けて成績がいいらしいです。それに先生からの期待も大きいらしくて」
だんだんと声が縮んでいく。
「お前とは正反対だな」
「ストレートに言わないでくれるッ！？」
「そうなのね。その講師にたくさん教えてもらえるといいわね、ディオくん」
「……はぁ」
ため息ともとれる返事。
「その講師が女の子だったらいいのにな。かわいい子だとなおよし」
ヴェイルが立ち上がった。
「……勝手に言ってろ」
「かわいくねーな。んじゃ、俺午後の授業があるんで」
あぁ僕も授業いかないと……また先生に怒られる。体を起こそうとしたが、
「ふごごごごごご……」
無理だった。
「あ、ヴェイルくん。授業が終わったあとディオくんを迎えにきてあげて。こんな状態じゃ帰れないだろうから」
「了解っすー」
先生、本当にありがとう。
「……ごめん、ヴェイル」
「いいってことよ、お大事にな」
片手をあげて、カーテンの向こうへ姿を消す。
「いい友達をもったわね、ディオくん」
マレンダ先生が、色っぽく笑う。
「本当なら、立場的に先輩後輩なんですけどね」
「いいじゃない、大事にするんだぞ」

お茶目に言われた。でも、なんとなく言葉に深みがある。
「どうも……」
「それで悪いんだけど……私今から急用で、行かなくちゃならないのよね」
「えぇっ！またですか」
最近多い気がする。
「誰かきたら自分でどうにかするように言ってほしいの。いいかしら？」
いくらなんでも適当すぎません！？
「わ、わかりました」
「本当にごめんなさいね。それじゃ！」
「いってらっし――」
すでにいなかった。おそるべしスピード……。
……一人になった。まあ、よくあることだ。やることもないし、お腹を冷やしながら寝ることにする。

＊　＊　＊

「失礼します」
澄んだソプラノの声で目を覚ました。誰かが来たらしい。
「……マレンダ先生？」
声からして女の子だろう。カツカツと靴をならし部屋に入ってきた。
「……はっ」
そのとき、自分のお腹に異変を感じた。異様に冷たい。
布団を持ち上げて下を見る。氷の袋が破れてぐっしょりとシーツが濡れていた。
ヤバい。なんか漏らしたみたいだ。
「マレンダ先生？どこです？」
これ、見られたら絶対に引かれる！布団で隠そうと思ったとき、

カーテンが開いた。
「マレンダ先生？」
「あ」
遅かった。
金髪に縦巻きロールという華やかな髪型。白い肌に、大きな瞳は一見可愛らしい印象を受ける。だが、今の険悪な表情では、そんなこと一ミリ足りとも思えない。
「…………誰」
「………………あ、あの」
「ベッドで漏らすなぁぁぁぁぁぁ！！」
女の子は侮蔑と気持ち悪さが混じった悲鳴をあげた。
「誤解だぁぁぁぁぁあああああああ！！」
それをかき消すように僕も声をあげる。
「なにが誤解よ！バカ！」
女の子は手を振り上げた。その手には長い棒が握られて――え？木刀！？
「ただの水なんだぁぁぁぁあああ！！」
身の危険を瞬時に察する。せめてもの防御として顔を背けた。
「……ッ？」
しかし、いつまで待っても訪れない痛み。不思議に思い、ゆっくりと顔の向きを戻す。
顔がひきつった。眼前には、木刀。ぎりぎりのところで止めたらしい。
「水？」
女の子は、整った顔をゆがませ、疑問を表した。言い訳のチャンス。
「お腹にあざが出来てさ、それで氷で冷やしてたんだ。そしたら、袋が破れたらしくて、シーツが濡れてさ……いや、漏らしてないぞ！これは本当！」
「あざ？氷？へぇ？」

僕の言葉を確かめるように、シーツへと視線をやる。
「な、納得してもらえた？」
「……えぇ。いきなり悪かったわ」
木刀が、顔から離れていく。助かった。
「まぎらわしいことしないでよね」
嫌悪をあらわにして、女の子がポツリ。
「したくてしたんじゃないけどな！」
聞いているのかいないのか、質問してくる。
「マレンダ先生は？」
僕は言われてた言葉をそのまま伝えた。
「先生なら急用でいない。怪我なら自分でなんとかしろとのことだ」
「かなり適当ね」
呆れた口調でつぶやく。女の子は隣の部屋から、包帯と消毒液を持ち出してきた。そして、ひとつのベッドを机替わりにして、手当てを始める。
「どこか怪我したのか？」
「……じゃなきゃこんなとこ来ないわよ」
おそらく腕を怪我をしたのだろう。背を向けて、一人で包帯を巻いている。
……手馴れた様子だった。
「手伝おうか？」
「気持ちだけ受け取っておく」
「きみ、武技科だよな？自分で治療とかできるのか？」
このペルクール学校には、一般授業、武技科、療治科がある。一般は必修科目となっているが、残りの二つは選択科目となっている。
そして、選んだ科目で制服が違う。女の子が今着ている制服は、武器を扱い、戦闘能力を高めるための武技科だった。
「これぐらいの治療、基本でしょ。誰でもできるじゃない」
早々に治療を終えたのか、道具を片付け始める。
「療治科はどんな状況であっても、応急処置ができるように、もっ

と詳しく教えてもらえるの。だから、頭がよくないと授業についていけない。武技科よりも多くのことを勉強しないとだめ。要は私向きじゃないってことよ」
……知らなかった。療治科の方が難しかったんだな。
「あんたじゃ１００％ついていけないね」
「だろうね。いや、え？」
さっき、自然とバカにされなかったか？空耳かと思っていた僕に、女の子はさらに追い打ちをかける。
「学年の底辺って呼ばれてるあんたじゃ無理ってこと」
「初対面で心ズタズタだ――！」
なにこの人！見ただけで人の学力とか判断できるのかよ！
「僕のこと知ってるの？」
「知ってる。ディオでしょ。学校一の雑魚って色んな人から聞くわ」
「知りたくなかった新事実――！」
うわっ本当に有名人じゃん！嫌な意味で！
心の奥からわき上がってくるさまざまな感情を、ベッドに思いっきりぶつける。女の子は、冷えきった声で、
「見た感じ雑魚そうね」
「見た目で判断しないでくれるかな！」
「じゃあ強いの？」
「……いや、まだまだですけど」
今日は、なんだか悲しいことがいっぱいだなー。僕は、そっと目尻をぬぐった。
「あんた、なかなか鍛えがいがありそうじゃないの」
「喜ぶところ？ねえ泣くところ？」
「明日から、特訓開始だから。特別生徒用訓練室に来なさい。さっさとそのお腹、治しなさいよ。痛くて動けないとか言ったら半殺しってこと覚えておいて」
さりげなく物騒なこと言いましたね。
「それじゃね、雑魚」

去り際に、彼女は笑顔を残していった。僕が今まで見た中で一番、鳥肌の立つ笑顔だった。

「あ、名前聞くの忘れた」

……って、僕のこと雑魚って呼ぶのかよ！

二章〜孤独の中、彼女はその時を待ち続ける〜

――カランって武器の扱い上手いよな！
――将来、軍人として活躍しそうよね。いいなぁ。
いいな？どこがいいんだろう。強くなって、人を傷つける軍人になって……なにかいいことなんてあるの？
私には分からない。
でも、強くない私なんて誰からも必要とされない。
誰にも気づかれないまま、ひっそりと消えていく。そんなの嫌だ。
だから、私は――強さを求めている。
木刀を磨いていた手を止めた。顔をあげる。
誰かが世話をしているのだろう、色とりどりの花が目を楽しませてくれる。少し冷たい風が吹く裏庭。ここでベンチに座り、武器の手入れをするのが日課だった。
この木刀もだいぶ傷んできた。武器の傷は自分の傷、と教えられた。本当にそうなら私の心は、きっとボロボロだろうな。
「ちょいとそこのお嬢さん」
なんだか不良のような人が声をかけてきた。
「私？」
「そーそー、可愛いきみだ」
両耳にピアスをつけた男が優しい笑顔で近寄ってきた。
制服の胸ポケットについた校章の色は緑。上級生か。
「なんですか？」
こちらも笑顔で返す。可愛いと言われて嫌な気はしないから。
「深刻な顔してどうしたんだ？」
「え？そんな顔してました？」
自分の頬に手を当てる。
「ま、見ないと分かんねえよ。……なぁ、こんなとこでなにやってたんだ？」

「木刀の手入れです」
不良は、隣にあった木刀に目を移した。
「それ、きみの？ちょっと貸して」
他人のものを見てなにかわかることでもあるのだろうか。不思議に思いながら、一本を手渡す。
「結構使いこんでんじゃん。……油も塗ってんのな。しっかり手入れされてる。すげえ」
色んな角度から眺めたあと、そう感想をもらした。
「ありがとうございます。先輩は今から帰りですか？」
「正解。そのまえに、医務室にいるダチを迎えに行かなくちゃなんねえんだけど」
医務室？……雑魚のことか。そっと右腕をさすった。袖で隠れているが、替えたばかりの包帯が巻いてある。
「それは大変ですね。早く行ってあげてください」
「どーも、そうさせてもらうぜ」
不良が木刀をこちらに向ける。てっきり返されるのかと思って手を伸ばした。
しかし、違った。
「お前、もしかしなくても強い？」
さっきまでの笑みはどこかへ。真剣な眼差しをしていた。
自分では人並み以上の実力はあると思っている。でも、言いづらい。
「一勝負、どうだ？」
不良は、面白そうに目を細めた。どうせひまだし、いっか。
「やらせてください」
「そんじゃ悪いけど、この木刀借りるわ」
私はもう一本の木刀をつかみ、立ち上がった。
「よし、じゃあどっちかが参ったっていうまでな」
小さくうなづく。
背筋をのばし、深く息を吸った。そして、不良の方へ目をやる。

「どっちから行く？」
不良は、余裕を見せている。構えることすらしなかった。
「……」
なんというか……ずいぶんと意欲的な態度ね。しかし、あれは彼なりの挑発法なんだろう。冷静さを失ってはだめだ。
視線をそらさないまま、相手の動きを待つ。
私が向かってこないのがつまらなかったんだろう、不良が動きを見せた。
「俺からいかせてもらおうか」
木刀に力をこめる。不良はまっすぐに距離をつめてきた。流れに乗って、木刀を後ろにひく。
突き出す気だろう――先読みをして、身をかがめる。しかし、剣は私の方へと流れてきた。
とっさに木刀で受けとめる。威勢のいい音が響いた。
「すごいですね」
私が下に潜りこんだ瞬間、木刀の向きを変えるなんて、いい反射神経してる。
「いやいやきみも。受けとめられるとは思わなかったぜ」
動きはたしかに俊敏だ。でも、わずかに遅い。これの程度なら、余裕で木刀でカバーできた。
次々と叩き込まれる木刀を受け止めていく。不良が、小さく舌を打った。
「なぁ……攻撃はしてこねえの？」
そう言うなら……。左手で木刀を支え、横から殴りこむ。
「よっと」
不良は上半身を反らしたあと、素早く反撃。全力で木刀を振ってきた。
「ッ！？」
身をおどらし、横へ転がりこむ。標的を失った刀は、芝生へとめりこんだ。

「……な、な」
なにこの人……いきなり真剣になって。
こんな威力の振り、もし当たったら痛いじゃすまされない。
「あ、わりい。ついマジになっちまった」
反省の色が見られない笑み。
「いえ……大丈夫ですけど」
乱れた前髪を軽く整え、もう一度、戦闘態勢に入る。すると、
「いて！」
不良が木刀を落とした。表情をゆがませ手首を押さえている。
これは……誘導作戦？警戒心を解くことなく、にらみ続ける。
「あー」
不良は困惑した表情を浮かべた後、
「参った」
両手を挙げた。
「どうしました？」
私は体の力を抜く。
「……手がしびれる」
「あぁ」
木刀を打ちこんだときの衝撃だろう。不良の手首を軽く握る。
「痛くないですか？」
「全く。お嬢さんの柔らかい手のおかげで回復しました」
「変態ですか？」
「それは誤解です」
手首から手を離し、自分なりの考えを言う。
「多分一時的なものです。気になるようでしたら先生に薬をもらうといいですよ」
「詳しいんだな。ありがとよ」
私は落ちていた木刀を拾いあげた。
「先輩、強いですね」
ちょっと疲労感のある笑顔を浮かべる。

「んなお世辞、いちいち言わなくていいんだぜ」
「……そんなことは」
まあ、お世辞だけど。大体この人、前半は力抜いてたし。
ごまかすために、話を変える。
「そろそろ医務室へ行った方がいいんじゃないですか？友達、待ってますよ」
「やべえ！忘れてた」
ひどいな。けど、たしかにあの人影うすそう。
「んじゃ行ってくるわ。時間とって悪かった。あ、あとな」
「はい？」
「次やるときは、本気出してくれよな」
……あぁ。気づいてたんだ。
「本当は俺なんて楽勝に倒せるんだろうけど……今度はお互いマジでやろうぜ」
「楽しみにしてます」
今度、か。
不良の背中を見送る。私は、ひとつ息を吐いた。
「で、急用は済んだんですか？マレンダ先生」
私は後ろに声を飛ばした。
「なんだあ、気づいてのね」
花壇から人影が起き上がった。医務室担当教師、マレンダ先生だ。
「気づくもなにも、体の半分以上隠れてなかったですよ」
最初見つけたときは、鼻で笑った。でも、必死に無表情をつくっていた。
「でも、彼の方はなにも言ってこなかったじゃないのー」
「言わなかっただけで、気づいてたと思います」
なんで、この人はこんなに抜けているんだろうか。突っ込んでも突っ込みきれない。
「じゃあ今度はうまく隠れてやるわよ」
「……好きにしてください」

「にしてもヴェイル君が戦っているとこ初めて見たわぁ。かっこいいわねえ、思わない？」
にこにこと話を続ける先生に、私は、真面目に問いかける。
「先生、聞きたいことがあります」
「……はいはぁい、言いたいことはわかるわよ」
先生も笑みを消す。
「カランちゃんとの話題なんて、ひとつしかないものねえ」
空気が、急に冷えきったような気がした。
「なら教えてください。イル・モンド……最近はどんな動きを？」
イル・モンド。この国の各地で、殺戮を繰り返している、黒装束を着た謎の集団。ここ数ヶ月で、奴らによる被害が拡大している。
先生は、遠くを見つめて口を開いた。
「さっき緊急会議が開かれたのよ。そこで聞いたことを教えてあげる。……やっと国が措置をとりはじめたわ」
「本当ですか！」
これはいい情報だった。
「えぇ、軍学校の卒業生で、成績優秀だった生徒は、各地に派遣されるとのことよ。これで、奴らの動きも少しは収まるんじゃないかしら」
「……そうだといいんですが。でも……でも警戒体制を強化したとしても……誰も殺されないわけじゃない」
たかが派遣程度で、イル・モンドの勢力が簡単に衰えるなんて思えない。だって、あいつらは……最悪で最凶だから。
「こーら、そんな顔しないの。えいっ」
「……え？ちょっ」
頬をつかまれた。左右、上下といろんな方向に動かされる。
「あははは、かわいいー」
強い強い！引っ張りすぎ！
「いひゃいんでふけど！ひょっと！」
「あらあらぁ、ごめんなさいねえ」

赤くなっているであろう頬を優しくささる。
「カランちゃん、そんな自分一人で背負っちゃだめよ？イル・モンドのことは、みんなで……国にいるみんなと協力していかなきゃならないんだからね」
「協力、ですか」
「そうそう。ゆっくりはしてられないけど、あせらず行きましょ？」
あたたかな笑顔。この人は、すごい。いつも頼りないくせに、なぜか信用できてしまう。少し、気がラクになった。
「ありがとうございます」
「あ、わかってると思うけど、話したことは……」
「えぇ、絶対誰にも言いません。そのかわり、また新しい情報があれば教えてください」
「わかったわ。これぐらいのことしかできないけど」
先生は、大人の雰囲気でウインクをした。私は首を横に振る。
「ありがとうございました」
「どういたしまして、帰るの？」
「これから、もう一度特訓をしてからです」
日が暮れかけている。沈む前までには、寮には帰らないといけない。
「……あまり強さに執着すると、自分が壊れちゃうわよ」
「えっ？」
「特訓、頑張ってねえ。それじゃあ」
いつもの調子で、先生は行ってしまった。
……あの人は、頼りなくて、それなのになぜか信用できてしまって、どこか重い過去を持っている気がする。不思議な人だ。
「……さ、頑張りますか！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0659x/

師弟関係の僕ら

2011年10月1日03時13分発行